

(8) にがうり

ア 各病害虫の防除

うどんこ病

つる割病

斑点病

アブラムシ類

ウリノメイガ(ワタヘリクロノメイガ)

オオタバコガ

コナジラミ類

アザミウマ類

ネコブセンチュウ

ア 各病虫害の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病虫害)

うどんこ病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 微生物殺菌剤は発病前から予防的に処理する。
- 2 気門封鎖剤を散布する。
- 3 発病を認めたら、薬剤を7～10日おきに施用(散布)する。

つる割病

(耕種的・物理的防除)

- 1 施設栽培では、かぼちゃ台木(新土佐1号など)に接ぎ木する。露地栽培ではとうがん台木を用いる。
- 2 発病株は早期に発見し、抜き取って処分する。
- 3 収穫後の茎葉を処分する。
- 4 石灰を施して土壌酸度を矯正する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 支柱及び床土を消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 本ぼは土壌くん蒸剤で土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

斑点病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病を認めたら、薬剤を施用(散布)する。

アブラムシ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
※アブラムシ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。また、アブラムシの種類と天敵の組み合わせによっては、効果が認められない場合がある。
- 2 気門封鎖剤を散布する。
- 3 定植時に、薬剤を処理する。
- 4 発生初期に、薬剤を施用(散布)する。

ウリノメイガ(ワタヘリクロノメイガ)

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬を散布する。
- 2 発生初期に、薬剤を施用(散布)する。

オオタバコガ

・[共通防除の章のオオタバコガの防除の項](#)を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 2 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆を行う。
- 3 本種に対しては、防蛾用黄色蛍光灯の夜間点灯の効果が高い。これは、ハスモンヨトウやシロイチモジヨトウなど他の夜行性の蛾にも効果がある。
- 4 交信かく乱剤を活用した防除を行う。
- 5 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

病害虫防除指針

(判断、防除に関する措置)

- 1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等を行う。
- 2 寄生果を見つけ次第、除去する。
- 3 食害や糞の近くには幼虫がいる可能性が高いので、発見に努め、見つけ次第捕殺する。
- 4 新芽や花蕾には卵や若齢幼虫がいることが多い。摘心した側枝や蕾はほ場外に持ち出し処分する。
- 5 生物農薬を活用した防除を行う。
- 6 作物残さを適切に処分する。
- 7 蛹化は土中で行われる。発生の多かったほ場では、ロータリーをかけたり、ほ場を冠水したりすることで、土中の蛹を死滅させる。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 交信かく乱剤を活用する。
- 2 BT 剤を散布する。
- 3 発生初期に、薬剤を施用（散布）する。

コナジラミ類

・ [共通防除の章のコナジラミ類の防除の項](#)を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 連作する場合には、作と作の間に施設内に植物が存在しない期間を設け、コナジラミ類がリレーされることを避ける。
- 2 育苗期の防除に努め、コナジラミ類が寄生していない苗を定植する。鉢物など、栽培に関係のない植物は、施設内に持ち込まない。
- 3 寄生範囲が広い場合、ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 4 夏期には露地においても発生が多くなるため、秋期より栽培（定植）の始まる作型では、施設内への成虫の侵入防止対策を徹底する。0.4mm 目以下の防虫ネット、紫外線除去フィルム、光反射資材によるマルチ等を活用する。

(判断、防除に関する措置)

- 1 特にタバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しやすいので、予防策を基本とした総合防除を行う。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等を行う。
- 3 成虫密度の低下のため、粘着シート等を設置する。施設で発生予察のために黄色粘着テープを使用する場合は、侵入防止を徹底したうえで、施設の出入口や側窓付近に張り、定期的に交換する。
- 4 生物農薬を活用した防除を行う。
- 5 本圃において化学的防除を行う際は、早期発見、早期防除に重点を置き、薬剤効果に差があるので種の区別を的確に行う。
- 6 薬剤散布を行うに当たっては、葉裏に寄生している幼虫、蛹にも必ず薬剤がかかるよう丁寧に十分な量を散布する。さらに、薬剤が株全体によく到達するように下葉の処分を早期に行うなど工夫する。
- 7 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
- ※天敵の放飼と薬剤散布（殺菌剤を含む）とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- ※コナジラミ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
- 2 気門封鎖剤を散布する。
 - 3 定植時に、薬剤を処理する。
 - 4 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

アザミウマ類

・ [共通防除の章のアザミウマ類の防除の項](#)を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
 - 2 発生初期に、薬剤を施用（散布）する。
- ※コテツフロアブルは定植後に使用する。定植後も葉に灰褐色などの斑点の葉害を生じることがあるので注意する。

・ [共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を施用する。